健康ひとくちメモ

こどものヘルニア（脱腸）について

ヘルニア（脱腸）について解説します。ヘルニアとは、本来では見られない異常な場所に腹腔内臓器（主に消化器）が脱出した状態です。ヘルニアは成人では腹壁が弱くなったこと（後天性）で発症しますが、子どもでは生まれつき（先天性）の疾患です。

1　鼠径ヘルニア（いわゆる脱腸）

男児の症状は、下腹部の鼠径部から陰嚢にかけて腫れて来ます。胎児期にお腹の奥に発生した精巣が、鞘状になって突起した腹膜（腹膜鞘状突起）と一緒に陰嚢内へ降りて来ます。腹膜の突起は自然に閉鎖消失しますが、残ってしまうとこの中にお腹の臓器が脱出して脱腸が発症します。特に腹圧が加わった際に顕著となります。押さえた時に、脱出した腸内のガスをグジュッと触れたら確定的です。まれですが、最悪の場合には脱出した臓器の血流が悪くなり壊死（嵌頓）します。現代では、これを防止するために生後早期から根治的手術をします。女児の場合には、消化管の他に卵巣や卵管が脱出することが有ります。この際には固い豆を触る感じがします。子ども100人中4人ないし5人程度の発生率です。下腹部の右側で男児に多いと言われています。

2　臍ヘルニア（いわゆるでべそ）

臍は胎児のへその緒の付着部で胎児期の血管の通り道です。生後、へその緒が落ちた後にそこが塞がらず腹圧が加われば、この中に消化管が出てきて脱腸になります。元気なよくきばる赤ちゃんが「でべそ」になりやすいです。症状は腹圧が加わった際の臍の突出です。圧迫すると脱出した腸内のガスをグジュッと触れます。

以前には、乳児では自然に治るので放置する指導がなされ、治癒しなければ手術となっていました。近年、小児外科では絆創膏による固定法が見直され、生後早めに適切な絆創膏固定が行われた際にはほとんどの「でべそ」が短期間で良い形状で治癒します。100人中5人ないし20人程度の発生率です。年長児では時にいじめの対象となることがあります。気になる場合は、早めに受診しましょう。

文　国際医療福祉大学病院小児外科
大塩　猛人先生